

京都産業大学 ことばの科学研究センター 2024年度第1回研究会

日時：2024年5月22日（水）14:00～16:00

場所：4号館2階 総合学術研究所

ノルウェー語の二つの公用書き言葉 言語政策の目的、現状と課題

高峰香織（UiT ノルウェー北極大学工学科学技術学部准教授）

世界には複数の公用語を持つ多言語国家が多くありますが、一つの言語に対し複数の「公用書き言葉」がある国は珍しいと思われます。ノルウェーはその稀有な国であり、公用語ノルウェー語には正書法で確立されたブークモールとニューノシュクという二つの「公用書き言葉」があります。人口約550万人の小国ノルウェーにおいて、なぜ二つの公用ノルウェー語書き言葉が定められているのでしょうか。このトークでは、ブークモールとニューノシュクを確立した言語政策を歴史的観点から考察し、現状と課題を概観します。

仏教漢文から見た記紀の交渉

森博達（ことばの科学研究センター員・京都産業大学名誉教授）

書紀の仏典表現はβ群とα群では種類が異なる。β群の仏典表現は古事記にも数多く見つかる。一方、α群の仏典表現は714年以後に加筆された箇所に見られるが、これらは古事記ではほぼ見られない。太田善麿は記序の幾つかの用語や用字が書紀の伊・イ（巻1～13・22～23）に偏在することから「伊・伊太安万侶参与説」を提唱した。私見では、安万侶は書紀の草稿を見て、712年に古事記を撰上した。その後、α群に仏典表現を含む記事が加筆された。かくて古事記にはα群ではなくβ群の仏典表現が用いられることになった。